

〔倭訓栞前編三十六〕よひ 日本紀に見ゆ、宵をよめり、萬葉集に初夜もよめり、夜間トの義成べし、畢

竟は夜なり、されどよひよなかあかつきなどいふは、初更を指ていふ詞也、宵も夜也とも、定昏也とも注せり、六帖に、

あかねさすひるはこちたしあぢさゐの花のよひらに相見てし哉、あぢさゐの花は四ひらある物なれば、宵らによせたり、よひらは夜をよらとよめるに同じ、

〔萬葉集雜歌一〕長皇子御歌

暮相ヨヒアヒテ而朝アサシタカモ面無美ミナモト隱爾カクナリ加氣カキ長妹ナガイモ之廬イハ利リ爲里計武セリケム

〔萬葉集十秋雜歌〕詠花

奧山オクヤマ爾住ニスス云男鹿ト云ノカ之初夜ノヨヒ不去ズ妻問ツメ芽子メコ之散久ノチク惜裳シモ

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、○中そのかよひぢに、夜ごと人に人をすへてまもらせければ、○中

人まれぬわががよひぢのせきもりはよひく。ごとにうちもねなむ

〔類聚名義抄七〕是夜コヨヒ

〔伊呂波字類抄天象〕此夕ココヨ 此夜コヨ 今霄イマヨ 已上

〔古事記上〕於是火遠理命、思其初事而大歎、故豐玉毘賣命聞其歎、以白其父言、三年雖住、恒無歎、今

夜爲大歎、若有何由故、其父大神問其智、夫曰、今旦聞我女之語云、三年雖坐、恒無歎、今夜爲大歎、若

有由哉、

〔古事記傳十七〕今夜は昨夜を云るなり、此は次の父神の言に、今旦云々とあれば、御歎を聞賜ひ

し、明朝の詞なればなり、其夜明て後も、なほ今夜と云こと、津國風土記、夢野鹿事を記せる處に、

明旦杜鹿語、其嫡云、今夜夢、吾背爾雪零於祢利止見支、伊勢物語に、今夜夢になむ見え給ひつる

と云りければ、源氏物語野分卷、野分せし明旦の詞に、今夜の風とあり、和泉式部物語に、いたく